



田島 征彦 ⑨
絵と文

光が降り注ぐ場所

妻のヒデコは引越越し魔で、結婚してから、おのころ島（淡路島）へ来るまで、4回も家を変わった。その度に何とか工面して、アトリエを用意してくれた。鉄骨で実用的な仕事場だった。おのころ島でも、倉庫を建てる時に世話になった島の鉄工所に連絡を取り、新しいアトリエ建設に、俄然はり切っている。森本くんも、設計図を持って、おのころ島へ来て、

相談に乗ってくれている。ほくは、新しいアトリエを想うだけで、身体の中に生命力が湧いてきた。大工さんは、初めて設計図なるものを渡されて、とまどい気味である。倉庫の屋根は随分高い。あの屋根の上がアトリエの床なのだから、あそこからの眺めはどんなだろうか。そんなことを想うだけでワクワクするではないか。それなのに、階段が急で、そんな高いところ

へ毎日登れますか？ エレベーターが要りませー！ 鉄工所のオヤジが心配しているヒデコが言う。屋根の上にアトリエを造るとするなら、毎日仕事をしている倉庫兼アトリエは、ガンガンと、頭の上からの工事の騒音で半年間は使えないと、やっぱり鉄工屋のオヤジが言ってくるのだ。半年間は他所で仕事をやるから、早く天空のアトリエを造ってくれ!! だん

だん夢がふさがってきて不安になる。建築に手付かぬまま季節はもう夏になっていた。その時は小豆島で講演中だった。スポンドの携帯電話が震えている。話しながらとり出したら、ヒデコからだ。緊急なら大変だ。メールで送ってくれたら見られるのに。ヒデコはパソコンからメールはできるのに、携帯のメールはにが手だ。講演が終わって電話したら、鉄工屋のオヤジは、倉庫の上にアトリエを造るのは、部下の職人たちにも反対されて諦めたらしい。ほくが耕している畑を半分つぶして、アトリエを建てることにしたと言う。

あの畑が半分になったら、野菜を自給自足するのは無理になる。荒れた土に、堆肥を入れて、10年をかけて、育てた土なんだ。畑をつぶすなら畑の土は大切に、こまき取って、どこかへ移動しよう。

家に帰ってくると隣の畑を貸してくれることになったと、ヒデコは、ほくをなだめるのだった。隣の畑は今までほくが耕してきた畑より、3倍ほど広い。新しいアトリエで新しく仕事を始めるのに3倍も増えた畑の面倒をみられるのだろうか。ほく一人オロオロしているウチに、着々とアトリエの工事は進んでいった。

下はセメントのタタキで、2階が幅が5尺、長さが10尺の、文句なしの広さ。森本くんのデザインで、上から自然光が降り注ぐ、今まで、味わたったことのない、気持ちの良いアトリエが完成した。15尺の大きな作品も、面白いほど、気分良く制作できた。

ペランダから、竹藪の向こうに海が見える。空気の流れが良く、風の強い日は両側の窓を閉めないで、作品まで飛んで行ってしまいたい。

薄暗い倉庫で咳をしながら、制作していた頃に比べたら身体中にやる気がみなぎってきた。畑もどこから、こんな力が出てきたのか、鋤をふり上げて耕す毎日だ。玉葱、にんにく、じゃがいもなども、1年分植えられる広さだ。

70歳の新しい出発、友だちと妻に助けられて、人生はこれからだ!

(絵本作家)

